

要旨 Abstracts

ワークショップ Workshop

学習者の意欲と動機を引き出す大学英語授業：ベストティーチャーに学ぶ授業運営

"Teaching Methods for Motivating Students in University English Courses: --Tips from an Education Award Winner on Classroom Management"

講師：柏原 郁子 KASHIWABARA, Ikuko (大阪電気通信大学)

【概要】

大阪電気通信大学のベストティチャーズ賞の対象となった「英語リーディング」の授業構成を紹介し、英語が苦手とする学生に対して、どのような教材を選び、どのように指導すれば学習意欲を引き出せるのか、その最も効果的な指導法のひとつである ICT を活用した授業運営について報告します。英語学習を継続する動機を引き出すためには、教員側からの働きかけであるコーチングが不可欠です。学生一人一人の習熟度を見極めながら、学生にあった教材を提供し、適切な到達目標に達するためのコーチングの Tips をお伝えします。

【略歴】

大阪電気通信大学教授

関西大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期修了

研究分野：e-Learning による英語教育・ICT を活用した英語教育教材開発・指導法の研究

受賞歴：2010 年度後期・2011 年度前期・2011 年度後期ベストティーチャーズ賞及び学生評価賞特別賞受賞 (大阪電気通信大学)

シンポジウム Symposium

動機づけ研究最前線：実践との対話を目指して

State of the Art in Language Learning Motivation Studies: Towards a Dialogue with Practice

講師・司会：中田 賀之 NAKATA, Yoshiyuki (同志社大学)

講師：新多 了 NITTA, Ryo (名古屋学院大学)

講師：竹内 理 TAKEUCHI, Osamu (関西大学)

指定討論者 小笠原 良浩 OGASAHARA, Yoshihiro (兵庫県立姫路西高等学校)

【概要】

言語学習において動機づけが重要であることは理解していても、それが何であるかについては共通理解が十分であるとは言えません。今回のシンポジウムでは、動機づけの基本的な要素を押さえたうえで、これまでの動機づけ研究の流れを概観し、それぞれのパネリストの先生の研究領域における最近の成果

を紹介し、現場の先生を指定討論者にお迎えし、最新の研究とそれらの実践との対話という方向で動機づけ研究について議論して参りたいと思います。

(1) 中田 賀之「外国語学習における動機づけ研究：これまでの成果と今後の展望」

研究者であれ実践者であれ、動機づけがどのようなものであるかについて知る事が、動機づけ研究および実践の第一歩です。その意味では、教育実践の現場（中学、高校、大学など）でどのようなものが求められているかについて知る事も大切です。これらを押さえつつ、これまでの動機づけ理論研究および最前線の研究を概観し、それらがどのような位置づけにあり、どのような可能性があるかについて論じます。その後、大学院の講義において採択した事例研究のデータに基づき、自己調整学習(self-regulated learning)のサイクルを阻害する要因とそれらを取り除く方法について論じつつ、学習者の状況を把握したうでの動機づけ支援のありようについてお話しします。学校文脈における外国語学習の視点で動機づけの研究と実践についてお話ししたいと思います。

【略歴】同志社大学 グローバル・コミュニケーション学部 教授。トリニティー・カレッジ ダブリン 言語コミュニケーション研究科修了(Ph.D. in Applied Linguistics)。兵庫教育大学大学院・連合大学院准教授を経て、2015年4月より現職。外国語学習（特に学校文脈）における動機づけ、自己調整学習、学習者・教師オートノミーを研究している。著書に *Motivation and Experience in Foreign Language Learning* (Peter Lang), 編著（近刊）に『自分で学んでいける生徒を育てる--学習者オートノミーへの挑戦』（ひつじ書房）などがある。

(2) 新多 了「生徒たちの動機づけを維持するには？：複雑系理論からのアプローチ」

大きな成果を上げる人はいつもやる気に満ちあふれていると考えがちですが、何らかの方策なしに長期にわたり高いやる気を維持することはできません。第二言語習得研究では伝統的に動機づけはあまり変化しない「静的」なものと考えられてきましたが、近年は動機づけを様々な要因が互いに影響し合い、また時間の経過とともにダイナミックに変化するものと捉え、複雑系理論のアプローチから解明しようとする試みが大きな注目を集めています。最近の第二言語動機づけ研究の動向を押さえながら、長期間高い動機づけを維持することができる学習者にはどのような特徴が見られるか、また近年の複雑系理論に基づく研究成果を、生徒たちの英語学習にどのように生かすことができるかについて考えます。

【略歴】名古屋学院大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学大学院応用言語学研究センター修士課程および博士課程修了 (PhD in Applied Linguistics)。第二言語動機づけ、タスク中心教授法、複雑系理論の第二言語習得の応用などについて研究している。最近の論文に "A multifaceted approach to investigating pre-task planning effects on paired oral test performance" (Language Testing, 2014), "Phase transitions in dynamic development of writing fluency from a complex dynamic systems perspective" (Language Learning, 2014), "Self-regulation in the evolution of the ideal L2 self: A complex dynamic systems approach to the L2 Motivational Self System", in Z. Dörnyei et al. (eds.), *Motivational Dynamic in Language Learning (Multilingual Matters)* などがある。

(3) 竹内 理「英語学習の動機を高め、維持するには：動機づけ要因と動機づけ方略」

中学校までの授業で英語を学ぶ時間数は、公立学校の場合、おおよそ 280-300 時間と推定されるが、この時間数は、外国語を習得するには相当に少ないものと言わざるを得ない。このため教室外での自主的な学習が重要となるが、教室外での英語学習を動機づけ、これを維持していくように働く要因に関して実証的に調査した研究は、あまり多くない。そこで、この発表では、中学生を対象として、教室外での自主的な学習を何が動機づけているかを探り、その要因の影響が、時間とともにどのようにダイナミックに変化していくのかを示す。その後、これらの研究結果に、動機づけ方略 (motivational strategy) に関する筆者らの研究成果を併せて、英語学習の動機を高め、維持するには、我々英語教師はどのようにすれば良いのかを議論していく。

【略歴】 関西大学 外国語学部・大学院外国語教育学研究科 教授。博士 (学校教育学)。神戸市外国語大大学院修了後、米国モントレイ大学院へフルブライト奨学金で留学。その後、同志社女子大学助教授などを経て現職。著書に『外国語教育研究ハンドブック』、『より良い外国語学習法を求めて』(ともに松柏社) などがある。SYSTEM (Elsevier) の Editorial Board のほか、多数の国際研究誌の Reviewer を務める傍ら、中学校 (NEW CROWN: 三省堂) や高等学校 (LANDMARK, Sailing: ともに啓林館) の検定教科書の執筆にも携わっている。

第 3 回 JACET 英語教育セミナー English Education Seminar

中高大グローバル教育最前線

Global Education Reform at Schools and Colleges

司会：石川 慎一郎 ISHIKAWA, Shin'ichiro (神戸大学)

講師：岩見 理華 IWAMI, Rika (神戸大学附属中等教育学校)

講師：羽藤 由美 HATO, Yumi (京都工芸繊維大学)

講師：山中 司 YAMANAKA, Tsukasa (立命館大学)

【概要】

グローバル化を見据えた英語教育のカリキュラム開発・教授法開発に関心のある、小学校・中学校・高等学校・大学の英語教員、及び英語教育関係者 (大学院生・学生を含む) が参集し、シンポジウムや賛助会員の協力による教材展示等を通して、小中高大連携の可能性を探り、グローバル人材育成をけん引する大学の英語教育の改善と発展に寄与する。

司会：石川慎一郎

【略歴】 神戸大学文学部卒業。神戸大学文学研究科・岡山大学文化科学研究科修了。文博。現在、神戸大学大学教育推進機構／国際文化科学研究科教授、神戸大学附属中等教育学校 SGH 研究委員長。専門は応

用言語学。

(1) 岩見理華「グローバル化に向けた神戸大附属中等教育学校の取り組み：英語教育と卒業研究の連携を中心に」

勤務校はグローバル人材育成を目指して、(1)課題研究を柱とした SGH, (2)ESD を軸としたユネスコスクール, (3)地歴の新科目開発の研究開発に取り組んでいる。これらは密接に関連しており、英語教育の高度化にとって重要な視点を提示している。中教審答申等で示されている教育の方向性から考えた場合、技能の定着に加え思考力や実践的能力の涵養は重要課題である。本発表では課題研究や ESD の推進が英語教育に果たす役割について報告する。

【略歴】兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程 教科・領域教育専攻言語系コース（英語）修了、ペンシルベニア州立テンプル大学院 TESOL M.A. Program 修了、神戸大学総合人間科学研究科博士後期課程コミュニケーション科学専攻テレコミュニケーション講座修了（学術博士）。現在、神戸大学附属中等教育学校グローバル教育推進室長、SGH 研究開発主任、英語科教諭。

(2) 羽藤 由美「グローバル化に向けた京都工芸繊維大の取り組み：スピーキングテスト導入を中心に」

京都工芸繊維大学は、独自開発のコンピュータ方式英語スピーキングテストを大学院入試に導入することを SGU 事業の目標の一つとしている。これに向け、2014 年度中にテストスペックを確立し、受験および採点システムを構築し、年度末には学部 1 回生全員がパイロットテストを受験した。本年 12 月には、この実績に基づく改善を加えた第 2 回テストを実施する。今回は、研究開発の進捗状況を報告するとともに、得られた知見に基づいて、外部テストの入試導入に伴う課題についても検討する。

【略歴】津田塾大学英文学科卒業。ロンドン大学インスティテュート・オブ・エデュケーション修士課程修了。現在、京都工芸繊維大学基盤科学系教授。専門は応用言語学。世界思想社より『英語を学ぶ人・教える人のために：「話せる」のメカニズム』出版。

(3) 山中 司「グローバル化に向けた立命館大の取り組み：プロジェクト発信型英語プログラムを中心に」

本発表では、立命館大学が掲げるグローバル化の施策をケースとして取り上げ、SGU において宣言した数値目標達成に向けての取り組みと直面する課題について現状報告を行う。また、どのようなグローバル化を目指そうとも、機能する英語教育のための不断の改革は必至である。立命館大学生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部で実施し、2016 年度から新設される総合心理学部において実施予定の「プロジェクト発信型英語プログラム」の成果について紹介すると共に、共同研究を呼び掛ける。

【略歴】慶應義塾大学総合政策学部卒、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程修了。博士（政策・メディア）。現在、立命館大学国際部副部長、生命科学部准教授。専門は英語教育政策・教授法、言語コミュニケーション論、言語哲学（プラグマティズム）。

研究発表・実践報告 Research Paper/ Practical Report

Session 1 【D311室】

<研究発表 1 Research Paper 1> 9:50-10:20 (Japanese)

日英語母語話者の事態描写比較と英語教育への示唆

How Learners and Native Speakers Describe Events Differently -Suggested Teaching Practice

吉田 ひと美 YOSHIDA, Hitomi (関西学院大学 Kwansei Gakuin University)

伊藤 創 ITO, Hajime (関西国際大学 Kansai University of International Studies)

本研究では、英語母語話者と日本語母語話者の画像の描写のあり方を、特に事態のどの参与者に焦点を当てるかという観点から比較を行った。その結果、量的・質的、いずれの分析においても、英語母語話者は、動作主に焦点をあてた描写の割合が高いのに対し、日本語母語話者においては、被動作主に焦点をあてた描写の割合が高いことが明らかになった。また日本語母語話者は、事態の参与者に入り込んで、その視点から事態を描くという特徴も見られた。

さらに本研究では、日本語母語話者による英語での事態描写についても分析を行ったが、その中では英語話者と同じような描写が比較的多く見られる画像とそうでないものがあることも明らかになった。こうした分析結果から、本発表では、より英語らしい事態描写のあり方、またその教授法について提言を行う。

<研究発表 2 Research Paper 2> 10:25-10:55 (Japanese)

用法基盤理論による小学校英語活動の実践研究

A Practical Research of Elementary School English Activities on the Usage-based Theory

岡本 真砂夫 OKAMOTO, Masao (姫路市立八幡小学校 Yawata Elementary School)

菅井 三実 SUGAI, Kazumi (兵庫教育大学 Hyogo University of Teacher Education)

本研究の目的は、英語圏における英語の母語習得について具体的なプロセスを説明する「用法基盤理論」を小学校外国語活動に援用し、その効用を検証することにある。

研究仮説として「用法基盤理論の知見が児童の英語習得を促す」とし、検証の方法として、外国語活動での児童の英語発話をUSB型音声レコーダーで採録し、その分析から下記の結果を得た。(1)第1段階の一語文は、非常にスムーズに習得され、数ヶ月を経た後も定着度は落ちていなかった。(2)第2段階の軸語スキーマは、Hi friends! の題材に基づいた指導により how + □ が形成されたことが示唆された。(2)第3段階の項目依拠構文は、児童に「動詞の島仮説」現象は強くは作用しないことが示唆された。

全体を通して、小学校外国語活動において、用法基盤理論という第1段階と第2段階で直接的な効果が見られ、第3段階での傾向は強くはないことが音声記録の解析から分かった。

<研究発表 3 Research Paper 3> 11:00-11:30 (Japanese)

協同学習が習熟度の低い学生に及ぼす影響

The Effects of Collaborative Learning among Low English Proficiency Students

中野 三紀 NAKANO Miki (大阪大学院生 Graduate Student, Osaka University)

本研究では協同学習を用いたグループプレゼンテーションを行い、習熟度が低い学生の動機の変化を質問紙を使用して縦断的に測定し、協同学習は学生のどの情意要因に働きかけるのかを考察した。近年、協同学習はますます注目を集め、様々な研究結果が報告されその有効性が示されている。しかしながら、習熟度が低いリメディアル学習対象のクラスにおいては、まだその有効性を分析的に示したものは少ない。したがって、質問紙の項目を内発的動機、外発的動機、Can-Do、協同学習と複数の情意要因に分け、質問紙調査を3回実施した。また学期の最後に協同学習に関する自由記述を行い、学生の回答を概念ごとに分類した。そして、(1)学生の動機の変化の全体傾向、(2)Can-Doは男女間で異なるのか、(3)協同学習に対する個人差要因という観点から調査をおこなった。結果、学生の動機について変化は見られたものの、Can-Doについては男女で差は見られないことがわかった。

<研究発表 4 Research Paper 4> 11:35-12:05 (Japanese)

文法訳読法の新たな教育的応用：文法項目と学習方略の関係から

New Application of Grammar Translation Method to English Education: The Relationship Between Grammar Items and Learning Strategy

井上 聡 INOUE, Satoshi (環太平洋大学 International Pacific University)

文法訳読法は、言語の意味よりも形式に焦点を当て、目標言語から母語への翻訳を活動の中心とするため、コミュニケーション能力の育成には適さないとされる (Celce-Murcia,1991)。その一方、複雑な文法構造の理解や大人数の授業に適するとともに (金沢, 2012)、学習者の認知プロセスの向上に与する (McLaughlin,1978) といった長所も指摘されている。そこで本研究では、訳読法の効果を検証するために、英語教員を志望する大学3年生を対象として、英語表現Iの評価問題集に基づいて後期授業 (全15回) をおこなった。毎回課した構文暗唱テストのデータを分析した結果、下位群の学習者の記憶ストラテジーが向上する一方、記憶よりも理解が優先される文法項目 (比較など)、および、上位群と下位群を弁別しうる文法項目 (静, 2007; 清川他, 2005) (無生物主語など) の特定につながった。今後の英語教育において、訳読法が果たすべき余地はまだ残されていると言える。

Session 2 【D310室】

<研究発表 5 Research Paper 5> 9:50-10:20 (Japanese)

音読練習と高速音読練習の大学生の TOEIC リスニングスコアへの影響

The Impact of Rapid Oral Reading and Repeating Practices on Japanese College Students' TOEIC

Listening Score.

下村 冬彦 SHIMOMURA, Fuyuhiko (神戸女学院大学 Kobe College)

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の発表以降、英語運用力の高い人材への需要が高まっているが、未だ日本人学習者はリスニングで苦戦する傾向にある。本論文では、音声知覚の運動理論を紐解き、近年効果的なリスニング指導法として話題を呼んでいる高速音読やリピーティングなどが、いかにこの理論の内容とそぐうか検証した上で、これらの指導法を用いてリスニング授業を行った場合と行わない場合とで、大学生の TOEIC のリスニングスコアにどのような影響が出るかを検証した。389名の TOEIC 400点から520点を取得している大学生に協力を依頼し、彼らに高速音読やリピーティングを行うリスニングのクラスを受講したグループと、それらのアクティビティを行わない授業を受講するグループに分かれてもらい、授業受講直後に TOEIC を受験を依頼し、2つのグループのスコアを比較した結果、有意差が見受けられたのでその詳細を検証した。

<研究発表 6 Research Paper 6> 10:25-10:55 (Japanese)

日本人大学生は TOEIC の学習に取り組む中でどのような経験をし、何を得たのか

Exploring Japanese University Students' Learning Processes of TOEIC

香林 綾子 KOBAYASHI, Ayako (甲南大学 Konan University)

本研究の目的は、日本人大学生がどのように TOEIC の学習を経験し、そこから何を得たのかを探り、教育的示唆を提供することである。TOEIC の学習経験がある大学生 (5名) を対象に、半構造化インタビューを行い、データを収集した。データ分析の理論的枠組みには西條 (2007) の構造構成主義をおき、モデル (仮説) を構築した。モデルからは、(1) 様々な動機、及び将来の自己像に支えられ、TOEIC の学習が始まる。(2) 学習遂行期は、しんどさがあるものの学習が習慣化する。(3) 受験後は、学習者としての多くの気づきを得る、ということが明らかになった。将来の自分の為、という思いが学習に影響を与えるという知見は、Norton (2001) の学習者は将来のコミュニティーに近づくために言語学習に投資する、という議論を支持している。また、モデルは学習過程の可視化を可能にし、学生の声は多くの教育的示唆を提供する。

<研究発表 7 Research Paper 7> 11:00-11:30 (Japanese)

内容言語統合学習(CLIL)における学習者の学力層別学習モチベーションの変化について

The Effect of Content and Language Integrated Learning (CLIL) on a Learner's Motivation: A Comparison Based on Scholastic Ability

谷野 圭亮 TANINO, Keisuke (大阪教育大学院生 Graduate Student, Osaka Kyoiku University)

本研究では公立の工業高等専門学校において発表者が実践した CLIL を取り入れた英語の授業の前後に、受講するときに学習者がどのような点に焦点を当てて参加しているかを問うアンケート調査(N=32)を19項目5件法にて行った。CLILの方法は言語重視型の Soft-CLIL である。毎回の授業で行っている

小テストの平均点から学習者を上位、中位、下位に分類し、アンケート結果とともにコレスポンデンス分析を実践の前後に行った結果、学力上位層は CLIL の授業を受けた後については「内容」に焦点を当てて授業を受講するようになり、下位層については「内容」に焦点を当てて受講していないことがわかった。この分析の結果から、CLIL は学力上位層の学習モチベーションを言語面だけでなく内容面にまで広げることができる反面、学力下位層については変化をもたらしにくいことがわかった。本発表では、CLIL の授業展開とそれが学力層別の学習モチベーションにどのように影響するのかを考察する。

<研究発表 8 Research Paper 8> 11:35-12:05 (Japanese)

コーパスに基づく構文分析と授業への応用

Construction Analysis Based on Corpus and Its Application to English Teaching

長谷川 順子 HASEGAWA, Junko (佛教大学 非常勤講師 Part-time Instructor, Bukkyo University)

本発表では、〈cannot help ~ing 構文〉と〈It be+形容詞+of+人+to 構文〉を対象として、可変部に入る要素の頻度をコーパスで調査し、頻度に関する法則、Zipf's law (順位×頻度=定数) が当てはまるかどうかを検証する。これにより、英語教育上もっとも効率よい構文例を示すことを目的とする。

研究仮説として、この法則が〈構文〉においてもおおよそ確認できると想定した。(1) cannot help ~ing 構文、(2) It be+形容詞+of+人+to 構文を例とし、コーパスを用い構文の典型例および展開を統計的に示す。結果として、(1)と(2)は、Zipf's law が厳密には当てはまらないが、最頻出の数語が、可変部の延べ要素のかなりの部分を占めることがわかった。(1)では、動名詞として feeling, wondering, thinking, noticing が約 40%を占めている。一方、可変部に入る要素として、一度だけ出現する語も多く、構文の要素はオープンエンドであることも注目に値する。コーパスに基づく分析により、高頻度の要素を特定し、構文の典型例を適切に示すことにより、学習者の構文の理解に役立てることができる。

Session 3 【D309室】

<賛助会員発表 Publisher Presentation> 9:50-10:20 (Japanese)

Pete Hamill の小説を題材にした大学リーディングテキスト (松柏社)

Pete Hamill's Best Stories From *The Invisible City: A New York Sketch Book* and "Going Home"

森永 弘司 MORINAGA, Koji (同志社大学 非常勤講師 Part-time Instructor, Doshisha University)

近年 TOEIC や TOEFL のような実用的な資格英語や ESP のような専門に特化した英語カリキュラムが主流になるにつれて、文学作品は年々刊行されることが少なくなり、教室で使用されることも減ってきている。しかしながら、文学作品は読みのモチベーションを高め、教養を深化し、語彙力や総合的な英語力を伸ばす上で効果のある教材である。また最近アクティブ・ラーニングの一つとして脚光を浴びている協同学習に適した教材でもある。今回のテキストではニューヨークのブルックリン生まれの小説家、コラムニスト、エッセイストの Pete Hamill (1935 年生)の短編集 *The Invisible City: A New York*

Sketch Book から 6 話と映画『幸福の黄色いハンカチ』のベースとなった "Going Home" を収録した。また精読力養成のためにパーシング（品詞の働きや動詞の活用等にもとづく精読法）の解説も加えた。

<研究発表 9 Research Paper 9> 10:25-10:55 (Japanese)

国際プロジェクトと英語教育の関連性：グループインタビュー調査結果

The Relevance of English Education for International Projects: Group Interview Results

辻 和成 TSUJI, Kazushige (武庫川女子大学 Mukogawa Women's University)

辻 勢都 TSUJI, Setsu (関西大学 非常勤講師 Part-time Instructor, Kansai University)

グローバル化と共に、国内外において国籍・文化・言語が違う企業間の協業が拡大している。そのような環境下、企業ニーズを反映した高等教育機関での英語教育の意義は高まりつつある。しかし、国際的なプロジェクトマネジメントにおける英語ニーズを的確に反映した英語教育が展開されているとはいえない。今回の調査では、国際経営において収益の根幹を担う国際プロジェクトに焦点を当て、英語ニーズに関する定性分析を実施した。具体的には、大手の製造会社で働くビジネスパーソンを対象にグループインタビューを実施し、国際プロジェクトでの英語使用の特徴、求められる英語力や専門知識についての調査を行った。その結果、国際プロジェクト特有の英語ニーズが明らかになり、その対応のために必要な英語教育に関する基礎データの収集ができた。本研究発表は、『大学と企業による実践的 EBP 教育の展開と接合』（基盤研究 C）の調査研究に基づくものである。

<研究発表 10 Research Paper 10> 11:00-11:30 (Japanese)

日本語を母語とする英語学習者の音声語彙認識における母語音声の影響について

The Effects of Native Phonemes of Japanese EFL Learners on Comprehension of Spoken English Words

藤本 恵子 FUJIMOTO, Keiko (神戸大学大学院生 Graduate Student, Kobe University)

本研究の目的は、日本語母語（L1 とする）英語学習者の音声言語での語彙認識に L1 がどのように影響を与えているかを実験的に検討することである。聴解での最小単位であり言語処理の中心的な構成要素である英語語彙の認識を阻害する要因を、日本語を L1 とする英語学習者（大学生）を対象とし、L1 にない英語母音音素の知覚に焦点をあてて探求した。日本語と英語の母音の数は大きく異なっており、日本人学習者は L1 より多くの英語母音を知覚しなければならないことが、学習者のリスニングを困難にする要因のひとつとなっているとの可能性を考え、日本語にない英語母音音素の出現条件を変え、知覚実験を行い、L1 音声聴解での語彙認識に影響を与えているかを調べた。参加者をリスニング成績と語彙サイズで 4 グループに分け、特に語彙サイズが大きくリスニング成績が低いグループの音声知覚にあらわれる結果から「知っているのに聞けない」現象を検討した。

Session 4 【D308 室】

<実践報告 Practical Report> 9:50-10:20 (English)

How to Integrate a Vision Board into an English Course

英語授業における「ビジョンボード」活用法

濱田 真由美 HAMADA, Mayumi (流通科学大学 University of Marketing and Distribution Sciences)

This presentation aims to introduce the idea of using a Vision Board, and to demonstrate why and how it can be effectively integrated into an English course.

A Vision Board is a board on which a collection of images and notes representing a person's dreams and goals are displayed. A Vision Board can be an effective educational tool to help students clarify, concentrate and maintain focus on specific goals and dreams.

This Vision Board project was conducted in four separate university elective English language courses over the span of three years. During the 15-week courses, the students were engaged in various activities such as brainstorming, information gathering, making a Vision Board, writing and giving presentations, and giving feedbacks on their classmates' presentations. The project was designed to help the students search their personal interests, discover dreams, take actions, and focus on goals, by going through all the activities mentioned above, with a step-by-step approach.

According to the results based on questionnaires and feedbacks from the students, it was found that the project increased their motivation toward learning English. It was also suggested that the project had a positive effect on the students' mental attitudes in life.

In this presentation I will also discuss further possibilities for using a Vision Board in a language course.

< 研究発表11 Research Paper 11 > 10:25-10:55 (English)

Applying CLIL and Problem-based Learning Approaches to University English Classes

大学の英語授業への CLIL 及び問題解決学習のアプローチの適用

PARSONS, Martin マーティン・パーソンズ (阪南大学 Hannan University)

CALDWELL, Matthew マッシュュー・コールドウェル (阪南大学 Hannan University)

As is well known, English language education in Japan has tended to emphasise the memorisation and mastery of grammatical structures and translation techniques to pass examinations. Despite having taken at least six years of formal English language education in this environment, many Japanese university students have little more than rudimentary ability to use the language in practice. Motivation is often lacking and students also often lack confidence. An approach which has improved student motivation and proficiency in Europe and elsewhere is Content and Language Integrated Learning (CLIL). Typically in CLIL classes, a second language and a content subject, like maths or geography, are taught simultaneously, with both being given more-or-less equal focus and attention. The degree of complexity and specialisation of many university level courses makes employing a conventional CLIL approach problematic. This presentation reports on a study which

aimed to discover if content and language integrated approaches would influence the attitudes of low-proficiency students towards the study and learning of English in university. Two multi-week projects, including the adoption of problem-based learning activities, were undertaken. Questionnaires were administered prior to and at the completion of the projects. Results indicate that student held a favourable impression of CLIL classes which utilised group work and generally felt slightly more confidence in using English in various situations. The implications of the results of the questionnaires for university-level English language education are discussed, and future directions for related research are suggested.

<研究発表12 Research Paper 12> 11:00-11:30 (English)

The Use of “I” by Native English Speakers and Japanese English Learners in Academic Writing

アカデミックライティングでの日本人英語学習者による"I"の使用

OKUGIRI, Megumi 奥切 恵 (聖心女子大学 University of the Sacred Heart Tokyo)

This study examines the production of English first-person singular pronoun “I” by native speakers and Japanese learners in writing academic essays. Many previous studies as Hyland (2002) and Ishikawa (2009, 2012) mention that Japanese learners tend to overuse “I” such as “I think” in writing; however, it has not yet been suggested exactly when and why they overuse the pronoun. Therefore, the current study will show the function of “I” by the learners showing the difference from the native speakers in order to identify the timing and the reason for the overuse.

The pronoun was extracted from the English Essays of Australian and Japanese College Students (EEAJ, a tentative name) (Okugiri, Komori, and Ijuin 2015) that includes native English speakers’ and Japanese learners’ opinion essays. The results showed that, among 51 Japanese learners and 78 native speakers, the frequency of “I” was much higher than the native speakers (295 times for the learners and 150 for the native speakers in total), and most learners (92.2%) produced the pronoun while only half of the native speakers (53.8%) used it. In addition, the frequency of the use was 6.27 times per learner and 3.57 times per native speaker. The results suggest that the learners produce “I” when they state their main argument showing their strong stance; meanwhile, the native speakers use it to mention their personal belief or to show supporting evidence or background information relating to their main argument. This finding reveals the difference in the use of objectivity between the learners and native speakers in academic writings.

Session 5 【D307 室】

<コロキウム Colloquium> 10:25-11:55 (Japanese)

大学英語教育における授業学：失敗を活用する

Classology in English Higher Education: Increasing Awareness to Improve Teaching Skills

村上 裕美 MURAKAMI, Hiromi (関西外国語大学短期大学部 Kansai Gaidai College)

工藤 泰三 KUDO, Taizo (名古屋学院大学 Nagoya Gakuin University)

池田 眞寸子 IKEDA, Masuko (帝塚山大学 Tezukayama University)

井上 加寿子 INOUE, Kazuko (関西国際大学 Kansai University of International Studies)

授業学研究会（関西）では「授業学」の研究と、その具体的要素として大学の授業内で起きる失敗をいかに授業改善と工夫に繋ぎ、授業の充実を図ることができるかを研究している。個々の授業者が認識する失敗は、当事者にとどまらず教員全体に共通する事例である。授業内における失敗を恥じる必要はなく、むしろ気づかないことの方が問題視されるべきである。しかし、せっかくの個人の内省が改善につながらないケースもあり、教員のモチベーションが下がる結果につながりかねない。失敗を共有し改善策を話し合うことが個々の教員の意識の変化や授業運営に変化をもたらす機会となる。本コロキウムにおいて授業学のとらえ方を紹介し、その視点から4名の発表者が自身の授業内での気づきと授業学研究会において得た改善策やその結果について発表する。本発表が一人でも多くの教員の授業に役立つことを願う。